教科書外教材の活用とパッケージ型ユニットによる質的転換を目指して

横浜市立東台小学校
吉野　剛史

１.はじめに

図１　『落とし物の靴』

記憶に残る一瞬の出来事や、言葉というのは、誰しもが体験したことがあるだろう。そんな論者も数年前、出張先に向かう道中で強く心に残った出来事があった。駅まで向かう途中にある公園を通り抜けようとした時、コンクリートのポールの上に、幼児のものであろう靴が乗せられていた。誰かのいたずらだろうか。「なぜ？」という疑問を感じたが、隣にいた同僚は、すかさずこう答えたのだ。「これって、優しい造形なんだよね。」

一瞬、論者の思考は停止したが、それはすぐに解決した。つまり、同僚が言いたいことはこうだった。親が幼児を抱くと、気付かないうちに子供の靴が脱げていることがあるそうだ。おそらく、そのような出来事に感づいた「誰か」が、落とし物を目立つようにポールの上にそっと置いたのだろうと。その言葉を聞いた瞬間、論者の「なぜ？」という疑問は、瞬く間に新たな世界観に変わった。それは、思いやりであり、優しさであり、気遣いでもあった。そのような光景に、論者の心はとても温かくなったのだ。しかし、不思議なのは、その「誰か」のさりげない行為の裏にある道徳的感性なのだ。子供達の道徳的感性を磨くためにはどうしたらよいのだろうか。そこに１つの答えはない。子供、学級、学校、地域…すべてが違うのだから。「特別の教科　道徳」を通して、子供達が豊かな心を涵養し、幸せに生きていけることを願って実践を行った。一例ではあるが、皆様にとって、何かの参考になれば幸いである。

２.道徳教育と社会的問題　～質的転換を図るための理論とその展開～

道徳の教科化の背景は、量的確保と質的転換であった。ところが、２０２０年３月に新型コロナウィルス（以下、COVID-19）の影響を受け、全国の学校で臨時の休校が続くことになった。その影響により、３５時間（小学校１年生は３４時間）の時数確保や、教員間での研修や研究などが密になることから難しくなった。道徳の教科化に対する本来の目標達成へ大きな課題を残した。「今できること」を模索しながら、質的転換を図るにはどうしていけばよいのか、理論と実践の両面から展開していきたい。

（１）パッケージ型ユニットとグループモデレーション

授業の中で無意識に使っている「問い」「問題」「課題」という言葉の意味を考えたことはあるだろうか。これらは授業の構想を練るうえでも大切なことだと認識している。樋口（2020）は「子どもたちの中から生じる疑問、問題意識、探求心が『問い』になる」と述べ、日常の子供達一人ひとりが感じもっているものであると解釈できる。「問題」[1)]とは

問いが抽象化されてより全体へと共有化され、「課題」とはその問題が解決に至るまでのプロセスであると考えられる。この３つの視点の繋がりが自然な形で流れていくとき、子供達は、はじめて主体的に道徳学びを行おうとするのだ。そのためには、もちろん教師の技術も欠かせない。田沼（2020）は「個別の『問い』を意図的に披瀝し合う場を設け、語らいを通してすり合わせ、調和的に調節し合い、学習集団全体の合意形成プロセスを経ての共通追求道徳課題設定を行う」ことを「グループモデレーション」と述べている。さらに 35 時間（小学校 1 年生は 34 時間）という限られた時数のなかで、現代的な複合的課題を効果的に解決するために提唱しているのが「パッケージ型ユニット」である。共通テーマを複数時間の単元化にすることで、関連したり相反したりする道徳的価値を多面的・多角的な視点から検討していこうとする試みである。

（２）教科書外教材の活用

道徳が教科化されたことで大きく変わったことに、教科書の導入がある。無論、教科書は全国の優れた研究者や実践家などが手掛けたものであり、高度に洗練された主たる教材である。しかしながら、目の前の子供の実態や現代の価値観が、教材と深くマッチしづらいこともある。例えば、「銀のしょく台」の実践では、子供から「１００フランってどれぐらい？」「モノを盗んだら犯罪なのに許していいの？」などのつぶやきが出てきた。子供達は現実世界の価値観を基準に考えているようである。無論、古典的教材の価値を否定するものではないが、教科書教材の学習効果を一層深めるような補助教材や、教科書外教材の活用も有効であると考える。なお、教科書外教材を用いる際には、学年や管理職等の了解も必要である点に留意したい。また、教科書外教材で授業を展開する際、教師の恣意的な内容とならないように注意するとともに、学習課題設定に関しては以下の３つの点に気をつけて構成することが望ましいと考えている。①真正性（リアルな課題になっているか）②レリバンス（学習者のやる気を起こすような切実な課題になっているか）③レディネス（学習者が少し背伸びをすれば手が届く程度の課題になっているか）

（３）ルーブリック（評価指標）を用いた「指導と評価の一体化」

道徳の教科化に伴い大きく変わったことに教科書が導入されたことは上記でも述べたが、もう一つの変化は「評価」が加わったことである。評価には主に、子供の学習状況を見取る「評価の視点」と教師の指導に対する「評価の観点」が存在する。適切に評価を行うことで、指導改善に繋げる PDCA のサイクルこそ「指導と評価の一体化」と言える。評価については「小学校学習指導要領　特別の教科　道徳編」第５章を参考にしていただきたいが、さらにルーブリック（評価指標）を援用することで、一層、信頼性と妥当性を増したものへとしていきたいと考えている。しかしながら、ここで特に留意したいことがある。あくまでも、ルーブリック評価は教師の指導改善のために使用されるものである。子供への評価、つまり「評価の視点」に用いてしまうと、到達度評価になりかねず、禁則事項に触れる可能性が高い。よって、ここで使用するルーブリックは「指導の観点」として使用することが適していると考えられる。なお、ルーブリックを授業づくりに有効活用するためには、一部教科担任制によるローテーション道徳や、ティームティーチングによる評価者の役割分担、またはビデオレコーダーによる録画なども考えられるだろう。

３.実践事例

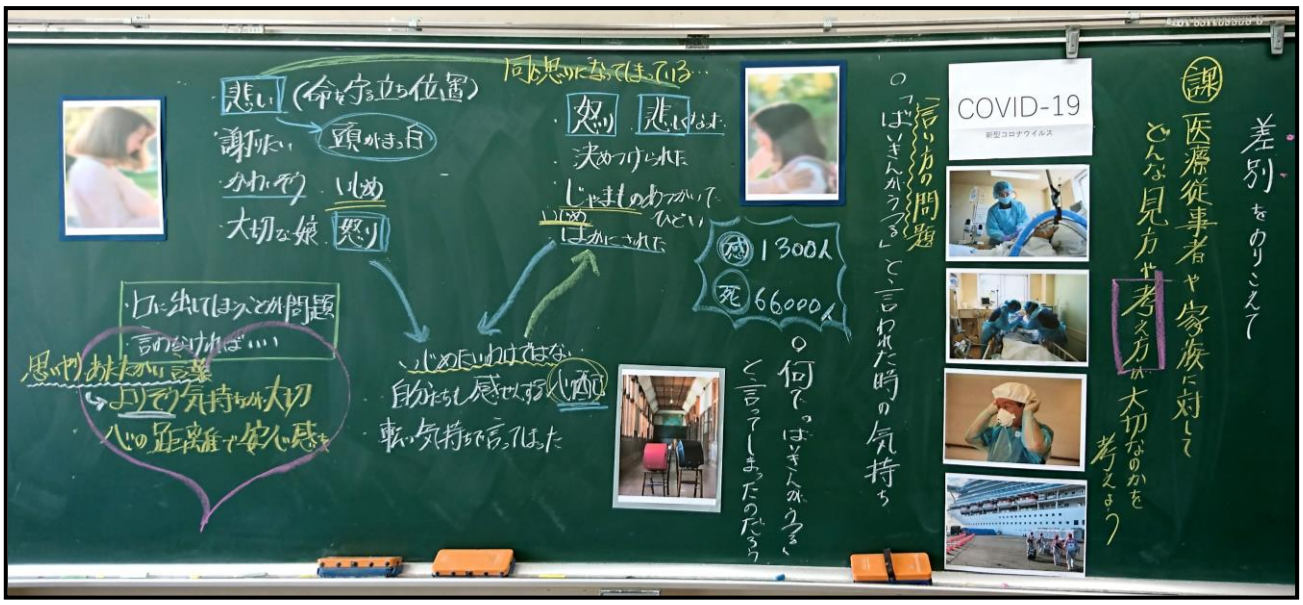
（１）パッケージ型ユニットによる実践

表１　『パッケージ型ユニット（TypeⅠ　重層型）』

時数	学習課題	教材名・内容項目	本時目標
第１時	差別や偏見をのりこえるために必要な考えは何だろう？	教科書外教材 「星はやさしく光っていた （ある中学校教諭の手記より）」 （西尾市教育委員会：石川雅春作） 内容項目 公正、公平、社会正義	COVID-19 に関わる医療従事者や、そこを取り巻く人達の思いや考えを話し合う活動を通して、差別や偏見に対する考えを深め、公正、公平に接しようとする心情を養う。
第２時		東京書籍 「田中正造」 内容項目 公正、公平、社会正義	前時の学習を生かしながら、差別や偏見に臆したり、自分の損得にとらわれたりすることなく、社会正義の実現に努めようとする実践意欲と態度を養う。

２時間の小単元で授業を構成し、内容項目は「公正、公平、社会正義」を続けて行うことで設定テーマへの深い学びを促す「重層型」とした。まず、第１時の最初に「差別や偏見はなぜ起こるのか」と「それを解決するためにはどうしたらよいか」という発問をし、既存の知識をもとに、子供から意見を引き出した。その後は、コロナ禍による差別的な社会問題がテーマにされた視聴覚資料を提示した。リアリティのある動画は、子供達の興味を引き付けるには効果的だろう。この時の子供の目線を確認したが、全ての子供がモニターに向かって注視をしていた。子供自身がもっている差別に対する「問い」と社会的な「問題」からモデレーションを通して、単元全体における大くくりの「学習課題」を設定した。なお、教科書外教材には、愛知県の西尾市教育委員会が公開している「星はやさしく光っていた（ある中学校教諭の手記より）」（西尾市教育委員会：石川雅春　作）を提示した。この教科書外教材が有効であると判断した理由は、近隣の港に COVID-19 に感染された人々が乗船していた大型客船が停泊していたこともあり日常的にニュースにも取り上げられていたので、子供達はその問題には敏感であったからだ。そのような背景があるからこそ、真正性、レリバンス、レディネスを十分備えていると考えた。C の視点のため、発問では、登場人物の視点を変えながら、それぞれの心情を考えた。特に、「ばいきんがうつる」と言ってしまった子供の視点では、「そんなことを言うのはいじめだ」「相手が傷つくからいけない」と非難する意見が出た。しかし、補助発問では、「なぜそのような言葉が出てしまったのか」という背景を考えさせることによって、「いじめたいわけではなかったけど、自分も感染してしまうことが心配だった」という意見が表れた。皆が不安であ

るからこそ、「お互いが、よりそう気持ちが大切」「心の距離で安心感を保とう」という共通解にまとめられた。　※前頁下から６行目の表現？



第２時では「田中正造」の学習を行った。前時の学習を復習し、モデレーションの際に使った模造紙を見せた。学習課題の設定では、「単元全体の学習課題」と「本時の学習課題」が存在するが、前時の学習も総合的に捉えてほしかったので、第２時はあえて単元全体の学習課題を用いた。教材の概要は、当時の日本が豊かになるために銅を採取するための鉱業を盛んに行いつつも環境問題の弊害が起き、特に農民にとっては健康被害が起こってしまい、国の対応としては差別的な扱いをされていたというものである。「鉱業か、農民の生活か」という対比的な物語のため、板書では左右に分けて横書きで行った。鉱業が盛んになるという場面理解から、子供からは「国というのは国民が豊かになること」「国民というのは、自分や家族、友達、大人から子供までが喜ぶ」という意見が出た。そして教師が「国が助けてくれなくて、差別的な扱いをされた農民はどんな気持ちだったか」という発問をしたところ「健康被害が怖く、生活できない」や「四民平等ではなく差別的だ」

図２　『第１時　板書記録』

、自分の利益にもならないのに命がけで天皇陛下に直訴をしたのはなぜか」という発問をすると「多くの人を救いたい」「助けないのは自分も悪人と同じになってしまう」などの意見が出され共通解に至った。共通解をもとに、自分自身の納得解を紡ぎ出していく。第１時、第２時、共にワークシートによる記述を行っているが、第２時の終わりは、全体を俯瞰する形でまとめるよう助言した。

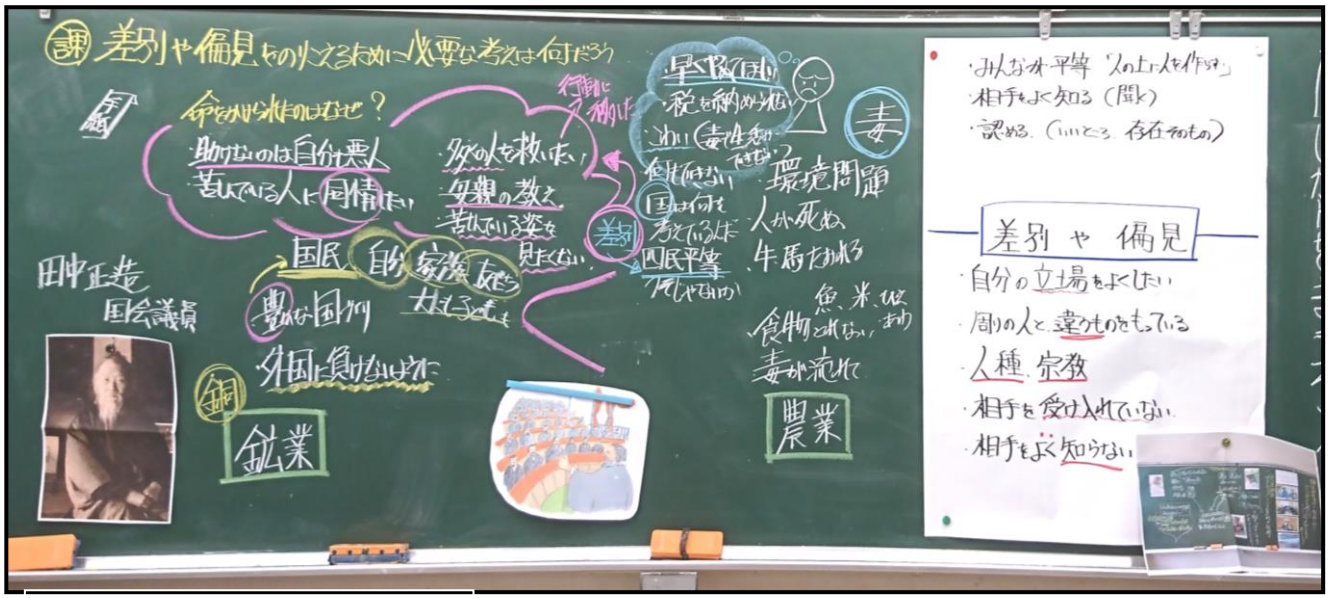


図３　『第２時　板書記録』

（２）授業後の考察（評価の視点）

第１時の教科書外教材で用いた写真や動画は、主に「日本赤十字社」のホームページや「You Tube」のニュースサイトなどを参考にした。大型客船の写真は、身近に停泊してあったこともあり「あー！」というつぶやきが全体に広がった。動画では、医療従事者の家族が、感染防止のために施設の利用を拒否される問題に「ひどい」と声をもらす子供や、大人の社会でさえ差別意識があることに問いを感じている子供もいた。授業の発言の人数は、全児童３４人に対して１２人であった。日頃の授業よりも若干、挙手が増えた印象がある。また、友達の意見を繋げて考える姿も見られた。（板書中央から左側にかけて見て頂きたい）

C1「いじめたいわけではなかったと思います。」
C2「自分たちも感染する心配があった」
C3「軽い気持ちで言ってしまった」
C4「心配の気持ちはあったと思うけど、口に出してしまうことが問題だった」
T　「今日の学習課題に戻るけど、どんな見方や考え方が大事だったのだろう？」
C1「思いやりや温かい言葉で寄りそう気持ちが大切だと思います」

C4 では前者の意見をまとめ、道徳的判断力に焦点をあてているのが分かる。また、教師の発問後の C1 は C4 の「口に出してしまうのが問題」という発言から「温かい言葉」が大切と繋げている。これらの対話的な思考から紡ぎ出された共通解をもとに、ワークシートでは多くの子供が自分の考えを記すことができた。

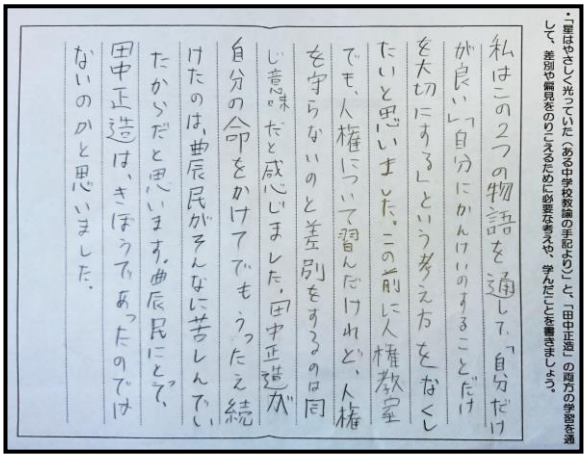
第２時では、社会科と関連して田中正造という人物を理解していた子供が複数人いた。また、当時の日本の文化に違和感を覚える子供もなく、導入の段階で興味や関心をもっている様子だった。環境問題の被害が明確なため、農民の気持ちになって考えやすかったようだ。授業の発言の人数は、全児童３４人に対して８人であった。農民の気持ちになって

考えた発問では、複数の意見が出て多面的に捉えることができた。「田中正造が自分の利益をかえりみず、命をかけてまで行えたのはなぜか」という発問では、教師のねらいとして「田中正造に、勇気や思いやり、正義感などがあった」ことを引き出したかったが、子供の意見からは農民に対しての心情理解を基にしていることや教材から読み取った内容が多く表れた。教師の意図とずれてしまったため、適切な発問ではなかった。この場合はいっそのこと「命をかけてまで相手のため行動した田中正造は、どんな性格だったからですか」の方が良かったかもしれない。発問構成の改善が必要だっただろう。

パッケージ型ユニットを通して２時間連続の授業を行ったが、振り返りのワークシートにも注目したい。上段（A 児）は、２つの教材から学んだことをまとめながら記述をしている。ここで意図はしていなかったが、第１時と第２時の間に、人権教育を行っていた。子供はさらにその際に学んだことも関連付けて、教科等横断的に道徳的価値の理解を深めている姿が見られたと言える。

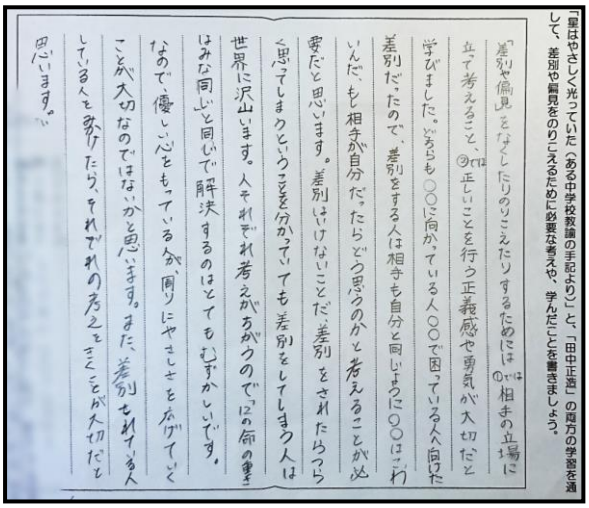
下段（B 児）は、第１時と第２時で学んだことを区別しながら、「相手の立場に立って考えること」「正しいことを行う正義感や勇気」など具体的に記述をしている。さらに、以前の学習で学んだ、教材「命の重さはみな同じ」から内容項目の「生命の尊さ」と関連付けて、多面的に価値理解を深めている姿が見られた。教師が想定していた枠組みを超えて、道徳の深い学びを子供自らが実現している姿には、大変、驚かされた。

今回、教科書外教材を用いて、グループモデレーションとパッケージ型ユニットを取り入れた結果、学習の連続性により、子供は道徳的価値を多面的に捉え価値観に拡がりをもたせることができたと言える。学習の質的改善に関しては、十分効果があったと考えられるはずだ。評価は、授業中の挙手だけが対象ではない。子供の頷く姿、聞く時の目線、肩の入り方まで、一挙手一投足、子供を評価するうえでは大事な情報である。一言も発しない子供でも、ワークシートから見取れることも多かった。「指導と評価の一体化」という視点で考えるとき、この学習がさらに次への学びに生かせるよう、学習の連続性を大切にしていきたいものである。


・「星はやさしく光っていた（ある中学校教諭の手記より）」と、「田中正造」の両方の学習を通して、差別や偏見をのりこえるために必要な考えや、学んだことを書きましょう。

私はこの２つの物語を通して「自分だけが良い」「自分にかんけいのないことだけを大切にする」という考え方をなくしたいと思いました。この前に人権教室でも、人権について習ったけれど、人権を守らないのと差別をするのは同じ意味だと感じました。田中正造が自分の命をかけてでもうったえ続けたのは、曲辰民がそんなに苦しんでいたからだと思います。曲辰民にとって、田中正造は、きぼうであったのではないのかと思いました。

図４　『Ａ児の振り返り』


・「星はやさしく光っていた（ある中学校教諭の手記より）」と、「田中正造」の両方の学習を通して、差別や偏見をのりこえるために必要な考えや、学んだことを書きましょう。

「差別や偏見」をなくしたりのりこえたりするためには①相手の立場に立て考えること、②正しいことを行う正義感や勇気が大切だと学びました。どちらも○○に向かっている人○○で困っている人向けた差別だったので、差別をする人は相手も自分と同じように○○はこわいんだ、も相手が自分だったらどう思うのかと考えることが必要だと思います。差別はいけないことだ、差別をされたらつらく思ってしまうということを分かっていても差別をしてしまう人は世界に沢山います。人それぞれ考えがちがうので「命の重さはみな同じ」と同じで解決するのはとてもむずかしいです。なので、優しい心をもっている人が周りにやさしさを広げていくことが大切なのではないかと思います。また、差別をされている人をみたら、それでれの考えをきくことが大切だと思います。

図５　『Ｂ児の振り返り』

（３）授業後の考察（評価の観点）

表２　『ルーブリック（評価指標）』

	A	B	C
道徳的判断力	道徳的な問題点をとらえ、よりよい集団社会を形成するために必要な見方や考え方を、自分の経験と比較したり関連付けたりして、道徳的判断力について考えている。	登場人物の道徳的行為の背景にある思いを類推しながら、道徳的判断力について考えている。	自己が中心となり、偏ったものの見方や考え方で集団社会をないがしろにしている。
道徳的心情	よりよい集団社会の形成のために共感しながら教材をとらえ、不正な行為は行わず、また、許さないという気持ちになっている。	登場人物の心情を理解しながら共感して考えている。	差別や偏見はやむを得ず、自然や社会の摂理であると捉えている。
道徳的実践意欲と態度	差別や偏見をなくすために必要な考えや意思を捉え、行動に移そうとする実践意欲と態度が身についている。	登場人物の行動に共感して、実践意欲や態度をもつよさを感じている。	差別や偏見をなくすには、相手が変わらなければいけないという他人事に終始している。

ルーブリックを使用する意図は「指導と評価の一体化」である。教師が設計した学習内容が適切であったかをチェックし、改善しながら次へ繋げるための指標である。本来は診断的評価、形成的評価、総括的評価、すべての子供の様子から見取ることが望ましいが、総括的評価（ワークシートの内容）から指導改善を試みようとしている点もご了承いただきたい。なお、ルーブリック作成手続きについては、①道徳部で作成。②学年会で共通理解。③管理職の承諾。という手順にしている。

ルーブリックを用いながら子供のワークシートの文章表現を選別し、以下のように分類した。

表３　『ルーブリック（評価指標）を用いた分類結果』

	A	B	C	計
道徳的判断力	2	１２	0	１４
道徳的心情	1	１１	2	１４
道徳的実践意欲と態度	3	3	0	6

道徳的判断力の分類が１４名、道徳的心情の分類が１４名、道徳的実践意欲と態度の分類が６名という結果になった。本時目標に照らし合わせると、「道徳的実践意欲と態度」を育む学習としては、指導改善が必要と判断される。例えば、①ユニット全体のねらいを再度練り直し、育みたい道徳性を再度検討する。②ねらい達成のために用いる教材を吟味しなおす。③発問構成を工夫する。などが考えられるだろう。

４.おわりに

B 児のワークシートのモザイク部分が気になった方もいただろう。そこには、「誰にも言わないでほしい」という切実な願いで教師への相談が記されていた。学級で、友達がからかわれているというものだ。解決しようと周りに声をかけているが解決策が見つからないという悩みだった。おそらく、この教材に出会わなければ、そのようなこともなかったはずだ。幸いにも、早急に対応できたので、この問題は学級で解決できるまでに至った。この子の「行為」の裏側にある道徳性や道徳的感性のおかげで、友達は救われたのだ。

教科書外教材の活用やパッケージ型ユニットは子供の道徳性を養うための深い学びについての有効性はあるものの、それが教師の意図的な指導のねらいに直結しているかは別問題であった。ルーブリック（評価指標）を用いて、指導の観点をチェックすることは教師自身の内省にもつながる。「With コロナ」が叫ばれる中、子供達に充実した道徳学びを実現していくためにも、私達は指導の改善に努めていかねばならないと考える。

〈註釈〉

１）問題と課題の違いについては、鈴木敏恵（2017）『AI 時代の教育と評価』教育出版株式会社の 104 頁と、カイゼンベース
『https://www.kaizen-base.com/contents/kall-42420/』のサイトを参考　にした。

引用・参考文献・参考サイト

田沼茂紀（2019）『[小学校]道徳科授業スタンダード～「資質・能力」を育む授業と評価「実践の手引き」～』東洋館出版社

田沼茂紀（2020）『問いで紡ぐ小学校道徳科授業づくり～学びのストーリーで「自分ごと」の道徳学びを生み出す～』東洋館出版社

樋口万太郎（2020）『子どもの問いからはじまる授業！』学陽書房

西岡加名恵（2018）『Q&A でよくわかる！見方・考え方を育てるパフォーマンス課題』明治図書

西尾市教育委員会『星はやさしく光っていた（ある中学校教諭の手記より）』「 https://www.city.nishio.aichi.jp/_resources/content/70583/20200625-102007.pdf」

第１時で使用した視聴覚資料
「https://www.youtube.com/watch?v=NPIaTa6Q7KY）」

日本赤十字社ホームページ
『www.jrc.or.jp』